十七歳の不在

第二章

八月五日

食事会の待ち合わせは十八時に池袋でいいねと、加奈から連絡が入る。

　了解です。と、レイが返信する。

加奈は北関東に住んでおり、二か月前に韓流アイドルグループのライブに一緒に行った。推しの集まるサイトで知り合ったが、レイは加奈が四十代であることや北関東に住んでいることぐらいしか知らず、加奈にもレイが東京に住んでいることや十七歳であることぐらいしか伝えていない。推しのメンバーへの愛を訴えるやりとりがほとんどで、そういった諸々の距離感や熱量が合っていたのだろう。

今日の食事会のメンバーは三人。加奈は待ち合わせの日時をモモコにも連絡している。

　モモコは東京在住。システムエンジニア。二十八歳。

加奈はモモコともライブに行ったことがあり、「社会科見学の一環です」と言いながら、グッズを買う行列に粛々と並んでいたところに好感が持てたとのことだった。

「池袋って、すごく大きな本屋さんもあるみたいよ。でも、まずきちんと西口に出られるようにしておかないとね」

澄子は自分のスマホで、今日のレイの外出先である池袋までの行き方を検索している。

「何かあったら、すぐに防犯ブザー押せるようにしておくんだぞ。お父さんの若い頃は、池ふくろうでよく待ち合わせしたけどな」

次郎も自分のパソコンで、池ふくろうを検索している。

「AIとか、レイが興味のあるITのお仕事のこと、教えてもらえるといいね」

両親の思惑を澄子がはっきりと口にする。

今夜、レイは澄子の洋服を借りる。紺地の細身のパンツにオフホワイトの長袖のYシャツ。外気は暑いが、室内や電車内では冷房も強く、紺色のカーディガンを着ている。レイはファッションに拘るときもあるが、今日は両親の指示に従っておくことにする。

「何とか、そういった話題に、水を向けてみます」

実際のところ、この一点で、レイは今夜の外出の許可を両親から得たようなものだった。アイドルのライブ参加がきっかけだったけど、現在進行形で都内でシステムエンジニアの仕事をしている人のIT界隈の話を聞けるなどという偶然を、チャンスとして活かしたいです、と。

　　十七時五十分

「間に合ったさ」

ライブの時に重宝しているマイバッグを入れた、ディズニーのキャラクターの刺繍の目立つトートバッグを、加奈は乱暴に地面に置く。靴以外は『しまむらルック』だけど、言わなきゃわかんないさ、と語尾だけはどこかの方言で、あくまでも田舎者であることを演じるスタンス。というか、地方在住なんだけど。

池袋の西口って、なんか沢山の西口で溢れてるけど、待ち合わせして大丈夫？

高崎とは比べものにならないくらい、ポリース(警官のことです)、多いし。

十五時三十分

　シェーキーズに来て、期間限定のミングルパフェがあることを加奈は知ったが、1.8リットルという大きさも知り、一人では無理でしたと、その一連の思考を悟られぬよう、アイスコーヒーを注文する。

本当に期待せず、東京の娯楽としての、少し前に話題になっていた、単館で始まり、全国的な上映へと進化したその映画を、加奈は観た。

ところで、加奈はいろいろなことに影響を受けやすい。ライブに参加しているときは、押しの存在のありがたさを考えていると、涙ぐんでしまうこともある。また、その後に動物が主人公のドラマや映画を観ると、その動物の可愛さや存在価値を、夫の喜一に懇々と力説してしまう。しかも、それは大抵、一晩経つとリセットされていることが多く「イタコが憑いてたんか」と、時に喜一を疲弊させもするのだが。

店を出る直前にトイレで鏡を見る。

ベリーショートに栗色の髪。

　へのへのもへじ程度の、特徴のない顔。

と表現したら、へのへのもへじに申し訳ない、ぐらいの謙虚さはあるが、それは鏡には映らない。

十三時五分

加奈、池袋にて映画「京都映画村で、僕(侍)と握手」を鑑賞。

 十八時

「特に遅れる連絡は入ってないから、この辺にいよう」

加奈は、地上に出てすぐの、スターバックス前に、邪魔にならないようにレイを立たせる。

「分かりました。加奈さん、モモコさんとは、かなり親しいんでしたっけ？」

　ハレの日のコスチュームの人たちの中で、ケの日のコスチュームのレイの周囲が、確実にワントーン暗い。

「メールのやりとりは、二年ぐらい。一緒にライブに行ったのは、二回ぐらい。この間、ライブ会場で、レイちゃんともニアミスっていうか。だから、レイちゃんの存在そのものは知ってるし、私からも、多少はレイちゃんのことを話題に出したことはあったと思う」

「私のこと？」

「レイちゃんとは、メールとかラインのやりとりは一年ぐらいだと思うから、せいぜい、そのやりとりの内容ぐらいだと思うけど」

「お待たせしました、モモコです」

　加奈とレイの二人ともが、ワインレッドのパンプスと黒のパンツスーツ、淡いバイオレットのペプラムブラウスを纏ったモモコを、わずかに見上げる。ラメの散りばめられたピンクのジャケットを羽織り、手入れの行き届いた藤色のクラッチバッグを持つモモコは、紛れもなく、ハレの日の人だった。

「パスタの店を予約していて。西口からあまり離れない方がいいかなと思って」

「初めまして、レイです。今日はお店の予約など、ありがとうございます」

「初めまして、モモコです。私の方は、全く初対面という気がしていない、ということだけ、お伝えして。お店に向かいましょう」

　シンプルな緑の黒髪のショートヘアと、小顔に整って配置されているモモコの目鼻立ちを見て、レイの口から、ハンサムですねという言葉が出そうになっていた。しかし、ハンサムじゃなくて、今の言葉でなんだっけ？と、それが思い浮かばず、結果的にただ大人しく歩くだけの女の子になっていた。

店につくと、四人掛けのテーブル席に誘導されたが、壁に面する奥側二名の席に、レイとモモコが並んで座るよう、加奈が勧めた。

「いざとなったら、駅までダッシュが必要なのが、私だから」

と、頑なだった。

「二十時三十分には、解散しましょう」

と、モモコが応じる。

　モモコと加奈には生ビール、レイにはジンジャーエールが運ばれてくる。

「乾杯」

　と、グラスがぶつかる音が鈍く響く。

　テーブルの上のキャンドルの炎が、おそらくは本来の出番とはズレたタイミングで、激しく揺れる。

「さっき、侍の映画を観てきたんです」

そう、加奈が切り出す。

「黒澤明監督の『七人の侍』ですか？」

　モモコが問う。

「『七人の侍』も、私は好きだけど。さっき観たのは、別のヤツです」

「あ、去年ぐらいに話題になった？侍がタイムスリップするっていう？」

「私は未だ観ていません。後で観たいんで、できればネタバレはナシでお願いしたいです」

　正確なタイトルは何だったっけなと思いつつ、レイはそう伝える。

「あ、大丈夫。侍がタイムスリップするっていうのは、そこまではタイトルになっているから。私は、ただタイトルを声に出して読んでいるだけだからね」

　丁寧に、モモコがレイをフォローする。

「アタシも、内容には触れないけど。侍、武士道、漢気なんかがさ」

「加奈さんのこの口調、かなりの名作の匂いが、してきます」

　茶化す調子で、モモコが言う。

「いやあ、でも、お金とかヒマとか、余裕があったら観てください。以上。はーい、もう他の話題にね、移ってねー」

　パンパンと手を二回叩き、加奈が他の話題の提供を促す。

「モモコさん、お仕事は順調ですか？」

　運ばれてきたパスタをトングで掴み、皿に盛りながら、レイが尋ねる。

「そうだね。順調ですね」

　レイが盛りつけたパスタの皿を受け取りながら、親しい口調と丁寧な口調が混じりつつ、モモコが短く返答する。

「レイちゃんも、IT系のこと、得意なんだよね？将来は、モモコさんみたいな仕事に就きたいんだって」

　レイの裏テーマを事前に知らせてあったかのように、加奈が続ける。

「そうだったか。いや、そういえば、レイちゃんって、ライブ女子であり、IT女子の一面もあったよね」

　もともとクリっとした目を、更に見開くように、つまりは驚きの表情を、モモコは見せている。

「私がITおたくなんて、モモコさんが忘れちゃってても仕方ないです。それどころか、知らなくて当然ってレベルです」

モモコが取り分けたサラダの盛られた小皿を受け取りながら、レイが微笑んで返す。

「今ね、レイちゃん。私たちのチームは、今までやっていたプログラム作成の作業の中で、AIに代行してもらえる部分はどこか？平たく言うと、効率化の部分ね、そういったところからアプローチを始めています」

「はい。今、モモコさんが仰ったことは、なんとか理解できます」

「AIが間違えてしまうこともあるんだけど」

「AIのそもそもの学習形態として、AIが知らないことを質問されると、なんとか近い内容で返答しようとする、ことがある」

　自分が読んだ本の具体的なページまで思い出すように、眉間に皺を寄せつつ、レイが答える。

「だから、人間がAIのミスをフォローする必要がある」

レイに呼応するように、モモコが言葉を埋める。

「他は、肖像権とか、ITのリテラシーとか。加奈さん、リテラシーってご存知ですか？」

　続けて、モモコは加奈にも質問する。

「最初の効率化の辺りからもう、加奈はチンプンカンプンです」

加奈とモモコの二杯目のビールが運ばれてくる。レイのグラスのジンジャーエールはまだ半分残っている。

　確かに、加奈さんは本当に理解できていないし、楽しくないだろうと、レイは思う。理解できない加奈さんが悪いわけでは、もちろんない。ただ、結果的に楽しくない時間になってしまっているのが、申し訳ない。

　店内の照明が切り替わる。ほぼ真っ暗で、壁際に吊るされたスクリーンに映る映像の明るさだけが残っている。ちょうど単館系の映画館にいるような感覚になる。一方で、BGMはワンワンと洋楽が鳴り響く。過去の名曲のremixバージョンのようである。

「ところで、レイちゃん」

　トイレから戻るタイミングで、モモコが切り出す。

「学校で模擬選挙があって心配なんだって？」

「模擬選挙って、仮にやってみる投票のことですよね？」

　十八歳以上に選挙権が変更となり、高校でもそのための取り組みが増えつつある。

「夏休み明けに、模擬選挙があるけど、どういう態度で参加すればいいのか？」

　レイの中にある思いを代弁するように、モモコが言葉にする。

「ああ、それ私だ」

　それに対し、小さく手を上げたのは、加奈だった。

「レイちゃんと、メールのやりとりを始めた頃、今は選挙権が十八歳からになって、夏休み明けには模擬選挙もあって大変です、みたいなレスがあってね。そんなシリアスな内容、このときだけだったと思うけど、私の中でなんか胸の辺りに残っててね。それで、今の十七歳は大変みたいよって、意訳も入っちゃって、モモコさんに伝えたことでした」

　話の着地だけはとても穏やかに、加奈が白状した。

このとき、レイはなぜか友達の顔、選子の顔が思い浮かんでいたが、

「確かに、夏休み明けにあります」

　とだけ返答した。

「だからね、そういうことも、AIに聞いてみましたよ」

　つまり、モモコは、模擬選挙のことについて、AIに聞いてみた、ということだ。

「まず、多数決のことについて答えてた思う」

【多数決って、七対三とか、九対一とか、所詮、大勢の多数派には叶わないって、思いがちだけど。分母が増えても、偶数だったら、常に一票差で引き分ける懸念がある】

【三人いたらもう多数決、でも、一人味方を呼んで、四人にしてみるとか。逆に言えば、一週間とか一か月とか、観察を怠っていたという側面は、やはり否めないだろう】

「加奈さん、起きてます？」

「はい、加奈さん、起きてます。酔ってません」

　呂律が怪しい上に、自分をさん付けしている加奈に、モモコがわざと話しかける。

「加奈さん、今までの人生で、選挙の思い出、何かありますか？」

「ないです」

「そうしたら、話、終わっちゃいますけど」

「ウチらの世代とか、ウチの田舎の方はさ、選挙の時に限らず、『〇〇党 山田太郎』みたいな看板とか文字をさ、わりと普段から心のどこかで意識してたりね。もちろん、あからさまな勧誘とかはね、したらいけないんだろうけど。同級生のお父さんが選挙に立候補するとかは、あったと思うし」

　依然として、怪しい呂律のまま、加奈が続ける。

「あとは、選挙の時に立候補者の看板に、やけに変わった名前の人がいたんだよね。平仮名で書かれていたけど、とても珍しい響きで。大人になってから、どういう漢字なのか分かったりして、単に珍しい苗字だったって分かるんですけど」

「看板に、いろいろと読みづらい名前があるっていうのは、私も共感できます」

　しばらく口を閉ざしていたレイが、返事をする。

「私も、共感です」

　手を挙げて、モモコも応じる。

　なんか知らないけど、流れで、自分の経験を話してるね。ムラにはムラのやり方とか。あとは結婚とか恋愛とか子育てとか。人それぞれそういうこともあったりする中でのことだからさ。日々の暮らしで、精一杯ってときもあるよ。

「あれ、今のヤツって、私の心の声だよね」

「いやいや、ほとんど、ダダ洩れでした。でも、加奈さん、本当に素晴らしいです。ねえ、レイちゃん。加奈さんからこういうお話が聞けただけでも、オフ会を開催して良かったよね」

加奈と同様、やはり呂律の回っていない口調で、モモコがレイに言う。

「モモコさんの仰る通りです。もちろん、モモコさんとお会いできたことも、本当に素晴らしい経験です」

　決して酔っていないはずのレイも、なぜか呂律の回っていない口調で、モモコにそう返事をする。

「それと、多数決のお話なんですけど。すぐに何か具体的に言えることがなくて」

　呂律の回っていない口調で、レイが言葉を続ける。

「すみません。多数決って、いつからですか？」

「いつ？いつから？」

　モモコは、目をぱちくりとしばたたかせる。

「紀元前」